

特集

企画 | 本田美和子

コ

ミ

ユ

ニ

処

方

する

医学が日々進歩を遂げる一方、その進歩した医療を実践に移す時、患者・家族との「コミュニケーション」がその選択・治療・転帰に大きな影響をもたらすこと、時に双方が望まない帰結にすらなりかねないことを、多くの臨床家が経験している。また、超高齢社会を迎えた今、医師としての知識と技能、そして治療を患者に受け取ってもらうためには、従前のやり方ではうまくいかないという事実、日本の臨床現場は直面している。良いコミュニケーションは、診療をスムーズにするし、患者-医師関係を円滑にする。それだけではない。効果的なコミュニケーション介入は、時に治療的に機能する。そのためには、どのようなコミュニケーションを患者、そして自らに“処方”すればよいのだろうか？医師が職務を遂行するにあたって、本当にとるべきコミュニケーションとは？経験豊富な第一線の臨床家・専門家らが論じた。

ユマニチュードも
オープンダイアログも
入ってます!



今月の Questions

- Q1 患者・医師間の「良いコミュニケーション」とは何か? >>> p.568
- Q2 患者さんと意見が合わないことは減多にありませんが、それは「良いコミュニケーション」がとれていると理解してよいでしょうか? >>> p.572
- Q3 「外来」でのコミュニケーションで重視することは? >>> p.576
- Q4 病状が安定した高齢患者さんの「入院」が長引き、回診の内容がマンネリ化している気がします。このままでよいのでしょうか? >>> p.581
- Q5 「対話」なんて、みんな毎日やっていることではないんですか?それが、なぜ治療に使えるのでしょうか? >>> p.587
- Q6 70歳以上の高齢者が急性疾患で入院した時、入院当初にはなかった新たな機能低下が退院時に発生している割合はどの程度か? >>> p.593
- Q7 バッドニュースを伝える時に重要なのは、「バーバル」か「ノンバーバル」か? >>> p.604
- Q8 多くの高齢者を外来で診察しています。ご家族や毎日の生活については気軽に話せるのですが、今後「終末期」となった時のこととなると、なかなか切り出せません。どのような準備をして、進めていけばよいのでしょうか? >>> p.609
- Q9 人工知能や情報学は、認知症の「見立て」や「ケア」の高度化に役立つのですか? >>> p.615